

アナログオーディオ & Newスタイルマガジン

平成21年1月20日発行(年4回刊) 第9巻第2号通巻22号 ISSN1349-595X

季刊・アナログ

# analog

2008  
WINTER  
vol.22

記事はオールカラー!

analog  
Grand Prix  
2009

**発表!**

真の価値あるオーディオ製品を選定

## 第1回 アナロググランプリ



アナログ関連モニター大募集

特集

レコードを満喫するための  
フォノライザー試聴テスト  
ターンテーブルシート道楽

年末特別付録

**アナログ機器データファイル〈総集編〉**  
すべてのジャンルの最新モデルを収録

- ビットインインタビュー「渡辺香津美さん(後編)」
- 浦沢直樹さん初のアルバムを語る
- モルトウイスキーの蒸留所を訪ねる
- ジャンルの異なる「匠」二人の特別対談
- レコード放浪記「名古屋編ほか」

好評連載

銘機を鳴らす

第8回「FOSTEX G2000」

いまこそクラシックカメラを楽しもう

第18回「ドイツの中小メーカー⑥」

東京都渋谷区、代官山といえは、高級ブティック、高級レストラン、高級スイーツ専門店に高級インテリアショップ、高級デザートスポット……と、何にでもカンムリに「高級」という言葉をつけたくなるような、ちょっとおめかししてから出掛けたい場所。街自体は「高級なところ」がまるであくどくなく非日常的ですらあるような「ハ

レ」のエリアである。そんな環境に立つ、インテリアショップのショールーム「ゼロ・ファースト・デザイン」にて、イタリアからやってきたナチュラル・サウンド・システム「Opere Sonore」の発表会が行われた。これにあわせて社長とエンジニアが来日したこともあり、取材する機会に恵まれた。

### 新しい音響装置 オペレ・ソノーレ登場

今回発表されたナチュラル・サウンド・システム「Opere Sonore」は、イタリアのチレーザ社によって開発された、新しい音響装置である。発表することなく自然な音を再生し、部屋のどの場所



外観デザインからも見て取れる、「帆」という意味のVela。「風のエネルギーが、結木が背つ森を吹き抜けていくようなノイズを表現した」とオシニペーニ氏。ストラディヴァリのパイオリンになぞらえて、モデルネームを「Passion」と命名

## Missing Link 近くて遠い楽器物語

# イタリアの銘器の森から生まれた オペレ・ソノーレという新しい音

時間芸術としての音楽、その表現のために使用される楽器や再生装置には、あまたの魅力がある。本企画はオルゴールや蓄音器の探求に始まり、これまでリュート、チェンバロなど、さまざまな楽器の魅力を多岐にわたって紹介してきた。今回は、イタリアに本拠を置く、楽器の共振板を製作するトップメーカー、チレーザ社が新たに開発し、話題を集めている再生装置に注目、その魅力に迫る。

撮影 / 奥宮信吾  
文 / 長田幹子



低音域をサポートするCUBE BASS。内部にはアベテ材の共振板が仕込まれており、26Hz程度の固有周波数から上部に共振する。天井や壁などにも設置可能



▲天体という意味のSidra。ボードの穴は彫削を要す。外観デザインはほかに4種あり、オーダーも相談可。左の写真はリア部。2つの丸いユニットがドライバーだ。木の特質に合わせて、彫削に加工されている



Opere Sonoreの操作用に、チレーサ社で独自に開発された、マルチドライブインターフェース。アンプ同様の機能を持ち、さまざまなオーディオをコントロールする



このOpere Sonoreを開発したチレーサ社は、元々ピアノやバイオリンの共振板を供給するメーカーである。2003年から開発に着手したそうだが、音響装置に分野を広げた経緯を聞いた。

### オペレソノレに込められた パッシブネットワーク

「このOpere Sonoreを開発したチレーサ社は、元々ピアノやバイオリンの共振板を供給するメーカーである。2003年から開発に着手したそうだが、音響装置に分野を広げた経緯を聞いた。」

「楽器の共振板を作り続けてきましたが、マーケットのなかでトピックオリテイの評判を得るようになりまして。会社として成長を止めないこと、すなわち新しい技術を磨くことが必要だと感じましたし、楽器作りのノウハウを別の分野で生かしてみたいと考えたのです」

と、オンニベニ社長は語る。開発は楽器づくりという観点から着手。スピーカーの筐体としてではなく「そのものを鳴らす」というコンセプトを掲げた。手本のないゼロからの製作のため、形、厚み、大きさなどを吟味し、数多くのプロトタイプを生んで研究を重ねてきた。「この世にないもの」を作るというチャレンジは、多くの壁を乗り越えねばならず、苦戦の連続だったという。試行錯誤を重ね、3年の月日をかけてようやく完成に至った。

Opere Sonoreの製作は全て手作業で、木の特性を感じながらポジショニングをしていく。と、オンニベニ氏が、木村の見本を手にして、ノックするように叩いた。そうすると、「コーン」と振れるような音が響く。音感ながら筆者も叩いてみたが、鈍い音がするだけ。「どこに響く場所があるのか、木を見れば分かる」のだそう。木は生き物だから、おしなべて同じように加工するわけにはいかない。共振板のクセを見極めながら、熟練された技術が投じられる製作過程により、オンリーワンという付加価値が生まれる。こういう製品にこそ、シリアルナンバーが記される意



楽器づくりのノウハウを生かし、熟練された職人の技により木と会話しながら制作される



アマールティ、ヴァルネリ、そしてストラディヴァリによって欠かれない材となった、フィエーナ深谷で産出されるアペテの木。樹齢150年以上のものを採採し、64~5年以上置かせる



右、社長のアマールティ・ヴァルネリ氏、自社の技術を継承し、新しい分野への進出に積極的であり、本工場のアペテ・ヴァルネリ氏、ロロナーの楽器の調音に尽力し、成長を遂げた。

義があるのではないか。  
「ハイファイシステムに慣れ親しんだなかにおいて、Operre Sonoreは逆に元のオリジナルに立ち返り、目の前で聴いているようなアプロチができると信じています」  
とオンニベニー氏。そして、最新の特クノロジーに左右されることなく、水い年月を経ても楽器のように味わいを深めながら、子孫代々へと受け継いでいくことのできる普遍性をもっているのだと語る。

### 銘器の森を守り 銘板を作り続ける

さて、Operre Sonoreには、かのバイオリンの銘管を生んだストラディヴァリ（17世紀後半〜18世紀前半に活躍）が重用した、アペテ材が採用されていることも、特筆すべき美点だ。イタリアのフィエーナ深谷でしか採れず、楽器製作に最も適した「魔法の木」としての呼び名が高い。というのも、この森はイタリア北部の寒冷地であり、日光が届きにくい渓谷であるため、年輪が緻密で乱れがなく、節目が少ないからだ。まさに「奏であるために生まれた木」なのである。

「木を知り尽くした」人物なのである。木の成長具合を確認し、その年に採採する本数を決めて森を維持する。まったく採採しない年さえあるそうだ。  
採採された木材は、1年以上かけて屋外で寝かせ、自然に木の内部のさまざまな成分を飛ばす過程を経る。このシーズニングによって、狂いや割れがなくなるのだ。材に限りがあるうえに、手間と時間をかけて熟成させる銘木である。  
ストラディヴァリのバイオリンの音色が美しいのは、経年変化にも一因があるといわれているが、木にわたって使い続けられることを前提にしているOperre Sonoreも、音に変化があらわれることを予測しているのだろうか。  
「アペテ材は、時が経つほどに音色がよくなることはあっても、悪くなることはありません。百パーセントよくなるでしょう。四百年経ったのちに、私が生きていないのは残念ですが」  
と、オンニベニー氏は笑顔をにじませた。  
このOperre Sonoreは、代官山のインテリアショップのショールーム「ゼロ・ファースト・デザイン」にて常時展示されている。興味をもたれた方は、ぜひ足を運んで、音色を堪能してみたい。

●製品問い合わせ/ 楽クラフトスワエル

●ゼロ・ファースト・デザイン/ 東京都目黒区青葉台2-1-3-1 電話03-54489

16101 <http://www.01st.com/>